



FSCだより

北里大学獣医学部 附属フィールドサイエンスセンター

第 52 号 2014. 1. 30

FSCの設立趣旨

土地、植物、動物及びそれらを取り巻く環境を生命系として教育・研究を行うとともに、これらの研究成果を通して、広く地域社会の発展に寄与することを目的とする。

十和田農場から

細断型ロールベアラーによる飼料用トウモロコシの収穫

秋になり飼料用トウモロコシの収穫時期等を検討していたところ、台風の襲来に遭い約7割が倒伏してしまいました。

例年であればコーンハーベスターで刈取り、ダンプに積込んで実験実習家畜棟の裏にあるバンカーサイロに堆積密封してサイレージ化していたのですが、農場のコーンハーベスターでは倒伏したトウモロコシを収穫出来ないため、大幅な収量減が見込まれていたところ、ヤンマーアグリジャパン株式会社東日本カンパニー青森推進部から細断型ロールベアラーによる飼料用とうもろこしの収穫作業をデモンストレーションで行って貰えることになりました。

実際の収穫作業では、倒れたトウモロコシを起こしながら刈り込んでいくコーンハーベスターと、すぐ脇を追走して細断されたとうもろこしをホッパーに受け入れロールする細断型ロールベアラー、排出されたロールにフィルムを巻き付ける自走式ラップマシンの3台の機械で行われました。



今回のデモンストレーションでは、細断型ロールベラーのロールに巻き付ける牧草用ネットに代わる物としてフィルム状のラップシールを使用して、巻回数や締め付け圧力等をメーカーの担当者が来場して、実際に行いながら調査を行いました。収穫量はロール個数で 68 梱、1 ロール当たりの重量は平均 360kg でした。出来上がったロールは運搬が容易であり、これからの飼料用トウモロコシの収穫作業の主流になるのではないかと恐れ、今後が期待されます。

八雲牧場から 収穫作業終了

今年の越冬用飼料の収穫作業がすべて完了しました。

昨年はバツタの影響により飼料不足が心配されていましたが、昨年の駆除（捕獲、牧草の早刈り）が功を奏し、今年度は例年並みに収穫することができました。今年は少し牛たちにも贅沢をさせてやれそうです。

放牧終了

去る 10 月 25 日、放牧されていた全ての牛を下牧しました。

今年は例年より若干早めに行った下牧作業ですが、それにより電気牧柵の回収作業などは雪の降る前に全てを完了することができました。

北里八雲牛が第 3 回北海道肉専用種枝肉共励会（経産肥育部門）で最優秀賞を受賞

11 月 7 日に北海道アンガス牛振興協議会と北海道日本短角種研究会の主催のもと、第 3 回北海道肉専用種枝肉共励会が帯広市にある北海道畜産公社十勝事業所で開催されました。

本共励会ではアンガス部門、アンガス交雑部門、日本短角種部門の 3 部門と本年度より新設された日本短角種経産肥育部門の計 4 部門に分かれ、部門ごとの枝肉評価により最優秀賞、優秀賞が決められます。

特に、日本短角種部門と日本短角種経産肥育（母牛）部門は研究会独自の枝肉格付評価基準と飼養管理（放牧および環境負荷軽減）などで評価されます。また今年度から日本短角種の経産肥育部門が新設された背景としては、雄は去勢され牛肉の生産を目的に飼養されますが、雌牛は牛肉としての生産を達成するために出産しないまま（未經産）肥育される牛と、繁殖牛として一年一産を目標に飼養される場合に分かります。しかし、分娩を終えた雌牛は経産牛と呼ばれ、一般的に複数回分娩するため飼養期間が長期化し、多くの部位の牛肉は硬くなり、脂肪交雑重視の柔らかい牛肉を求める市場での評価は高くありません。未活用資源を利用して牛肉生産を達成することを目標とする北海道日本短角種研究会では、肉用牛としての経産牛の価値を見直そうとの趣旨で、今年度より経産肥育部門を新設しました。

北里八雲牛は、昨年度は日本短角種部門で最優秀賞を受賞し、今年度は経産肥育部門で最優秀賞を受賞しました。

受賞理由は放牧を主体とした自給粗飼料 100%で生産されていることはもとより、部分肉歩留まり（枝肉重量/出荷時体重）が 59.0%、経産牛としてはロース芯断面積、バラの厚さが十分で、皮下脂肪の厚さが薄く、産肉性が高いことが評価されました。

昨年度に引き続き、今回の北里八雲牛の最優秀賞受賞は一般消費者の健康志向や環境問題への関心の向上と北里大学での放牧と自給粗飼料 100%での肉牛生産方式が広く認知されている証拠とも言えるのではないのでしょうか。



北海道大学技術研究会に参加

12月5日～6日に北海道大学で技術研究会が開催され、折目さんが参加しました。

この研究会は、大学の技術職員による技術職員の為の研究会で、分野はフィールド系・実験実習・分析・調査など様々です。

2014年の秋には、北海道大学で全国大会が行われます。農場職員に限らず、工学部や博物館職員など、専門の異なる技術職員の発表を聴講できる貴重な機会でした。

八雲牧場からは、地域と共同開発している塩麴ステーキの食味アンケート調査について発表しました。技術研究会は、他大学の他業種の技術職員の取り組みや実習のあり方を学ぶ良い機会であるとともに、北里大学獣医学部附属フィールドサイエンスセンターのアピールの場としても有効だと感じました。



(編集担当：畔柳 正)